

再生への一歩

道立高校としては閉校に追い込まれた「三笠高等学校」ですが、三笠市の市立高校として新たな出発を果たしました。

今年初めての出願状況は、道内で最高の2倍を超えるという人気の高さを示し、順調な滑り出しとなりました。

「三笠高等学校」は、1945年4月三笠町立の「北海道三笠工業学校」として開校、その後、1949年3月に道立へ移管されています。

1951年3月、全日制普通科を5学級設置し、校名を「北海道三笠高等学校」と改称します。その後、少子化の影響などから入学者が減少し続け、2008年4月からは普通科1学級の編成、2010年からは生徒の募集が停止となっていたものです。

道内における毎年の中学卒業生の状況をみると、昭和63年の9万2千人がピークで、その後は減少を続け、現在は4万9千人とピーク時の半分近くにまで減少しており、この傾向は今後も続く見込みとなっています。

この結果、校種を問わず、学校の間口（第1学年の定員）調整はもとより学校の再編を余儀なくされています。

人々が住む場所を選ぶ際、医療機関や教育機関が整っているかどうかということは重要な判断材料となっています。特に、就学する児童生徒を抱える親にとっては、最も関心が高い問題です。

また、地域にとっても、学校があるということは、そこに先生やその家族が住むということでもあり、地域経済にとっても波及効果は少なくありません。それだけに、地域から高校がなくなるということは、その地域にとっては死活問題であり、当然、地域ぐるみで廃校反対の狼煙が上がることとなります。

一方、高校の教育力という視点で見れば、教師の数、施設の状況、更には部活動などを見ても、学校規模の大きい方が（大きすぎてもいけません）より充実した教育を提供できますので、教育を受ける生徒の視点に立てば、高校の再編は避けられないところです。

「三笠高等学校」も生徒減少が続く中、ただ単に手を拱いていたわけではあ

りませんが、遂には閉校に追い込まれる事態となりました。しかし、地元市民は高校存続を強く望んでおり、これに応じて三笠市が市立高校として存続を決断したものです。存続に当たって、校舎や敷地は道から無償で譲渡を受けたとはいえ、その後の財政負担を考えれば大いなる決断であったと思います。

三笠市では、新しい高校のスタートに当たり、普通科を廃止すると共に、卒業と同時に調理師の免許が取れるカリキュラムを組んだ調理師コースと、パティシエを目指す生徒を対象にした製菓コースを新設することにしました。そのために、市では、6千万円をかけて調理台ダクトの設備などを整備しています。

また、寄宿舍も整備し、併せて光熱水費は市が負担するといったように、受入体制を整え、出願の日を待っていました。その結果は冒頭の通り、大きな反響がありました。その背景としては、調理師コースや製菓コースといった特色ある教育内容が生徒や保護者に評価された結果だろうと思います。

こうした特色ある教育を実践している公立高校は、道内には「おといねっぴ美術工芸高等学校」「置戸高等学校」などがありますが、今後も持続して生徒を集めるためには、学校としての実践力を常に高め、進学や就職についてもしっかりと成果を上げていく必要があります。ただ、「おといねっぴ美術工芸高等学校」は道外からも生徒が来るなど健闘していますが、資格取得においても就職においても高い成果を上げている「置戸高等学校」は苦戦しています。ここに、学校経営の難しさがあります。

市では今後、年間数千万円かかる学校運営経費や1千万近い寄宿舍の光熱水費の負担などが重くのし掛かってくることとなりますが、それは地域の期待の表れでもありますので、新生「三笠高等学校」が、そうした地域の期待に応え、重要な教育機関として大いに活躍されるよう祈っています。

(塾頭 吉田 洋一)